

創大中国論集

第 21 号

アレシャンドロ・ヴァリニャーノの布教の為の異文化受容

— 「日本諸事要録」(1583年)、「日本諸事要録補遺」(1592年)

を中心として — 高橋 強(1)

学习中文的外因与内因 李 燕(33)

創価大学文学部人間学科中国語メジャー

2018年3月

創大中国論集

第21号

創価大学文学部人間学科中国語メジャー

2018年3月

アレシャンドロ・ヴァリニャーノの 布教の為の異文化受容

——「日本諸事要録」（1583年）、「日本諸事要録補遺」
（1592年）を中心として——

高橋 強

目次

はじめに

1. 日本人司祭の養成
 - （1）教育機関の設置
 - （2）日本人に対する見解
2. 日本語学習用書籍の発刊
 - （1）辞書及び文法書
 - （2）日本語に対する見解
3. 同宿の導入
 - （1）修道士、同宿に対する評価
 - （2）同宿の導入の意味
4. ヨーロッパ人と日本人との統一（融和）
 - （1）統一（融和）への方策
 - （2）文化対話主義への萌芽
5. むすび

はじめに

アレシアンドロ・ヴァリニャーノ（1539-1606）はナポリの名門貴族出身で、1566年にイエズス会に入り、インドに派遣された。東アフリカとインドの巡察師を経て1579年に日本と中国の巡察師として初来日（その後1590年、1597年来日）したが、彼の来日により日本での布教は新たな段階を迎えることになる。彼は、通信制度を改め、日本年報を作成させヨーロッパに送らせたり、インド管区に属していた日本に独立的な地位である準管区を与えたり、布教区を都・豊後・下（西九州）に分割したり、日本人司祭を養成するために教育制度を設けたりした。

本論で取り上げる「日本諸事要録」、「日本諸事要録補遺」は、元来「日本管区及びその統轄に属する諸事の要録」（1583年）、同「補遺」（1592年）と呼ばれ、どちらもヴァリニャーノによって書かれたもので、前者は第一次の、後者は第二次の巡察報告である。この報告の特徴は、在日イエズス会宣教師の最高監督者としてのヴァリニャーノが、ローマのイエズス会総長に宛てた機密に属する真正真実の生々しい報告であるという点である。松田毅一氏は「本書によって、当時の日本のキリスト教会内部の深刻な諸事情や、宣教師達の想像を超える苦悩なり、彼等が直面し、解決を迫られた日欧の風習の相違にいかにか順応すべきかの問題、布教の最高方針といった宗教学的、文化史的にきわめて貴重なキリシタン史の内面を窺うことができる」（松田毅一『日本巡察記』東洋文庫229平凡社1988年12月緒論 ii）と述べ、その重要性を指摘している。

本論のテーマを「アレシアンドロ・ヴァリニャーノの布教の為の異文化受容」としたのは、前述の「日欧の風習の相違にいかにか順応すべきかの問題」を異文化受容の視点から捉え直してみようという意図からである。ヴァリニャーノは、布教の為に異文化を積極的に受容していったと考える。それ

には多くの批判が寄せられた。しかし彼は布教の為の布石を一つ一つ築いていった。彼は「布教の為」を貫く為に、日欧の風習の相違に積極的に順応していったと思うが、ただ布教の為それだけであったのか。異文化に対する興味であるとか、畏敬、賞賛（当初は驚嘆）の念であるとか、そのような部分はどうであったのか。ヴァリニャーノにとって「布教の為の異文化受容」とは何を意味するのか。

以上のような問題意識に立ち、本論では第一章「日本人司祭の養成」、第二章「日本語学習用書籍の発刊」、第三章「同宿の導入」においては異文化受容とその背景にある日本人及び日本語への見解からの分析、また第四章「ヨーロッパ人と日本人との統一（融合）」においては日本人への接し方の分析等を通して考察をすすめていく。

1. 日本人司祭の養成

（1）教育機関の設置

1579年巡察師ヴァリニャーノが来日した当時、布教区域は鹿児島から九州、西日本、近畿を通して美濃・尾張にまで及んでおり、イエズス会の担当している教会は約200、日本キリシタンは15万人（10万人という数字もある）に対し、イエズス会士は84ないし85人、その内司祭は32人であった。彼は布教会議を招集して在日宣教師の意見を聞き、また豊後から京都、安土までを巡察して教会の状況を見聞し、さらに日本人の識者とも協議したうえで、日本に適応した布教方針を確立した。そして将来、日本の教会は日本人の聖職者によって維持発展されるべきとの考えから、日本人司祭を養成するためのイエズス会の教育機関を設置することを提案し、直ちに実施した。⁽¹⁾

具体的には、1580年7月から1582年1月まで豊後臼杵・安土・長崎で分割開催された協議会で提議された教育に関する三議題に、ヴァリニャーノが

採決を下し実行に移した。⁽²⁾しかし、すべての宣教師がヴァリニャーノのように、日本人、日本文化のよき理解者ではなかった。2代目の布教長となったF・カブラルは、日本人に対し偏見をもち、日本文化を理解しようとせず、布教方法は根本的に食い違っていた。ヴァリニャーノは、それらの反対意見を退けて教育機関の設置に踏み切った。⁽³⁾

ヴァリニャーノは、ローマで修練院の教師を務めた経験があり、より多くの人材とそのより高度な学問的素養の育成を目指し、大規模な教育制度の編成を試みた。それは、青少年のための日本文学・ラテン文学などの人文課程を修めるセミナリオ（神学校）、修練期を終了した神学生が哲学・神学両課程を修めるためのコレジオ（学院）、そしてイエズス会士養成機関としてのノビシアード（修練院）の3つの教育機関であった。⁽⁴⁾

各研究機関の教育内容は大要以下のものであった。①セミナリオ：キリスト教的ヒューマニズムに基づいた広範な教養を習得すること。古典の学問と教養からなる人文学を身につけること、そしてそのために必要な語学教育と文学が重視され、ラテン語とローマ字の習得、日本語と日本の古典文学の学習が義務づけられた。さらに日本の固有の礼儀や習俗および礼法も学ばねばならないとされていた。⁽⁵⁾②ノビシアード：セミナリオを修了した者が、修道者としての資質を具えているかどうかを試す場。霊的書物を読み、これについて黙想し、良心を糾明し、説教の練習に努め、労働し、倫理神学を学ぶこと。⁽⁶⁾

ヴァリニャーノは、日本人はイエズス会に入会するに相応しい才能を有しているので、入会後修練院で2年間の修練を修了して、なおかつ能力ある者には、コレジオでの勉学の機会を与えようと考えた。③コレジオ：それは説教のために必要な日本人の教え（仏法）について学び、彼らの言葉で適切に書簡を認め、能力に従い、日本の都合に応じて文法その他の学問を学ぶためであった。⁽⁷⁾具体的には講義は人文課程をもって始まり、それにはラテン語と

日本語及び日本文学の二つの分野があった。その後哲学課程、神学課程が続いた。それ以外に『イソップ物語』、『平家物語』、『太平記』、『和漢朗詠集』などが講義された。⁽⁸⁾活字印刷機導入後においては所謂「きりしたん版」が発刊され、『エソポのハプラス』、『平家の物語』、『金句集』の合冊本や、日本の詩歌のための教科書付篇として『実語教』、『九相歌』、『雑筆抄』、『勸学文』や『太平記抜書』が加わった。⁽⁹⁾

教育機関特にセミナリオやコレジオにおいては、日本語や日本文学更には日本の固有の礼儀や習俗および礼法までが学習内容に入っている。コレジオの段階になると、『平家物語』、『太平記』、『和漢朗詠集』等などが講義され、かなり深い内容に触れることになる。

（２）日本人に対する見解

ヴァリニャーノが教育機関を設立しようとするに至った背景は、彼の日本人観察があった。彼は「日本諸事要録」第一章「日本の風習、性格、その他の記述」⁽¹⁰⁾、第二章「日本人の他の新奇な風習」⁽¹¹⁾において述べているが、要約すると次のように言うことができる。

第一は、国民は有能で、秀でた理解力を有し、子供達は我等の学問や規律をすべてよく学びとり、ヨーロッパの子供達よりも、はるかに容易に、かつ短期間に我等の言葉で読み書きを覚えるである。

第二は、服装、食事、その他の仕事のすべてにおいてきわめて清潔で、美しく調和が保たれており、ことごとく日本人がまるで同一の学校で教育を受けたかのように見受けられるである。

第三は、日本人が良い素質を備え、優れた数多の天性を保持していることは、驚嘆に値することであって、私が見たあらゆる諸国民の中では、彼等はいっしょに道理に従い、道理を容易に納得する国民である。

以上を踏まえて、彼は次のように判断している。即ち、結論的に言って日

本人が、優雅で礼儀正しく秀でた天性と理解力を有し、多くの点で我等を凌ぐほど優秀であることは否定できないところであると。

さらに第十七章「日本人は宗教に対して、いかに優れた素質を有するか。彼等の方法によっていかに容易に修道生活を行いうるか」⁽¹²⁾において、宗教教育、特に司祭の養成に対し日本人が、いかに適切な条件を備えているかについて述べているが、要約すると次のように言うことができる。

第一は、宣教師となるべき者の為に、主として三つのこと、即ち①その為の天分、②宗教に対する堅固な根気と強い心、③宗教上の徳操と学問に必要な能力が望まれるが、従来の経験から知り得たところによると、これら三つのすべてが日本人の中に見出されるということである。

②については、彼等は異教徒であるが、宗教に対する天性、傾向は非常に強い。

②については、彼等は子供の時から剃髪すると、直ちに生涯宗教に生きるように義務づけられたものと考え、名誉の為に、仏僧の中においても容易に堪え忍んでゆく。

③の「徳操」については、私は彼等以上に優れた能力ある人々のあることを知らない。彼等は更に、自ら感情を抑制し、愛情深く、温和で思慮あり、彼等の事物をよく考慮し、特に慎み深く、厳粛で、外面的教養に心を配り、飢餓や寒気によく堪え、厳しい環境に対してよく修練を積んでいる。

③の「学問にする能力」については、例えばラテン語に関して言うと、ラテン語は彼等にとってきわめて新しく、文がまったく反対であることや、我等の用語と最初の要素の名称が日本語に欠けている為に、我等の文法を日本語にすることは、はなはだ困難であるが、彼等が非常に敏感で、賢明で遠慮深く、かつよく学ぶことは驚嘆するばかりである。子供でも大人のように三、四時間もその席から離れないで勉強しているし、神学校では、短時間に非常に困難な日本語の読み書きと共に、ラテン語を日本文字で書いて読むこ

とを習得し、彼等の多数の者が楽器を奏したり、歌うことを学び、意味が解らなくても容易に暗唱する。ラテン文法が日本語で完全に説明され、将来、辞書その他必要な書籍が作られて、彼等がラテン語に入り始めたならば、非常に優秀な学生となり、我等と同様に、あるいはさらに短時間に進歩することは疑いない。

彼は以上を踏まえ次のような判断を下している。即ち「日本人は時と共に学問し、司祭になり、告白を聴き、ミサを読み、立派に教義を説くことができるようになるであろう。その際、彼等は日本人であり、言語や習慣を知っているので、常にあらゆる点で我等よりも優れた能力を有し、日本人から我等以上に深く愛され、尊敬されるだろう⁽¹³⁾」と。

なお「日本諸事要録補遺」「補遺七『要録』の第十二、第十三、第十四、第十五章について」の中で、日本人の日本文学に対する学習態度とラテン語に対するそれとを比較した部分がある。即ち、日本人は日本の文学と書物を研究し、それらで博識になりたいという嗜好が非常に強く、彼等の間で尊敬され、学者と考えられている人々は、日本の国語と書物を熟知している人々であるので、日本語を学ぶのには自らの全力を挙げて励むが、ラテン語の勉強は不承不承に、しかも強制されて行うのである。当時の実情が述べられており大変に興味深いし、ヴァリニャーノの現状認識の深さが判る。⁽¹⁴⁾

第二に、日本人の中に、修道生活を容易にならしめる諸要素を以下の4つの側面から見出している。

- ①教えられた生活方法や規則を容易に受け入れて遵守する。
- ②日本人修道士は、司祭を深く尊敬している。その点では、我等ヨーロッパの修道士達よりもさらに優れている。
- ③不平や悪口を容易に口にしないことを美德と考え、忍耐強く、数多の天性を具備し、貧困、従順、服従を我等のようには怪しまない。
- ④子供の時から神学校で強い服従と遠慮深さをもって育てられるから、幼

少時より服従することを学び、司祭に対する尊敬心をもって成長するので、イエズス会に入った後に、その生活に順応し、司祭に従ってゆくには大きい困難はないであろう。

彼はこれらを踏まえて、真実の精神が彼等の心の中に宿るならば、彼等は我等よりも優れた素質を有しているので、彼等はさらに優秀になるであろうと大きな期待をかけている。

以上の如く、ヴァリニャーノは異教徒である日本人に対し敬意を示しているが、その一方でヨーロッパ人との風習の違いに対してもその驚嘆ぶりを示している。「日本諸事要録」第一章「日本の風習、性格、その他の記述」⁽¹⁵⁾、第二章「日本人の他の新奇な風習」⁽¹⁶⁾において、日本人の善の面と悪の面の両方を挙げ、理解し難い現象を次のように述べている。

日本人は他のすべての国民とは、はなはだしく異なった儀礼や風習を有しており、まるで他のいずれの国民とも、いかにしたら順応しないかを故意に研究したかと思われるばかりである。これに関して生ずることは想像を絶する。事実日本はヨーロッパとは全く反対に走っている世界である。(略) 食事、衣服、栄誉、儀式、言語、交際、及び起居、建築、家庭内での奉仕、負傷や病気の治療、子供の教育、養育、その他すべてのことにおいて言語に絶し理解し得ないほど相違は大きく、正反対である。

高井喜成氏は、ヴァリニャーノの注目すべき点は、このように日本人を承知しつつも、それを教育を中心とする布教活動によって是正できるとした点であると述べているが、この視点から教育制度を設置したことを考えて見ると、その意義はきわめて大きいとすることができる。⁽¹⁷⁾

2. 日本語学習用書籍の発刊

1590年巡察師ヴァリニャーノが来日し、8月に加津佐で第二回協議会が開

催された。その際、諮問第12において、ヨーロッパ人宣教師の日本語の上達と、日本人のラテン語上達のための方法が検討された。そこでは完成度が高く、よく整理された日本語辞典を早急に作成すること、また日本語・ラテン語辞典と日本文典を編纂し印刷すること、すでに翻訳を終えていた数冊の書籍の印刷などについて結論を出し、ヴァリニャーノがこれを認めた。⁽¹⁸⁾

ヴァリニャーノは1579年に初めて来日した際に、ヨーロッパ人宣教師が日本語に習熟していない事実を知って、日本語の習得が喫緊の課題であることを認識していた。⁽¹⁹⁾従って1590年に来日した際には、活字印刷機をヨーロッパから（ゴアやマカオでも同印刷機を使ってすでに印刷を行っている）携帯した上で、前述の結論を出した。活字印刷機は加津佐コレジオに設置されて開版の準備が始まった。その後、コレジオは天草（1591年）、長崎（1598年）に移転していくが、移転先々で印刷は行われていった。なお印刷機の導入の第一の目的は、日本で日本人向けの教理書を作成し、疑念を引き起こすような異説や異端的な考え方を排除するためであった。⁽²⁰⁾一方このような金属活字による多量の印刷出版は、庶民層への布教にも大きな役割を果たした。活字印刷機によって印刷された出版物は、1590年から1614年までに50種とも100種とも言われ、うち32種74本が現存する。

（1）辞書及び文法書

ヨーロッパ人宣教師の為に、日本語学習関係の書籍の編纂事業は1580年代初頭に始まっていた。従って、文典と辞書の編纂と印刷は、宣教師たちの日本語学習に弾みを与え、また日本人修道生のラテン語学習にも便宜を与えた。まず1595年に天草で羅葡日対訳辞書『羅葡日辞書』が出版された。これは当時ヨーロッパで盛行していたカレピーノのラテン語辞書を基礎として、それに豊富な日本語対訳を添えたものである。この辞書は印刷に8ヶ月間を要したが、スペイン人ゴメスによれば、同国人のスペイン語学の第一人者ネ

ブリハのものにも劣らない質の高いものであった。⁽²¹⁾

この辞書はまた、説教のための辞書とも言われた。ヨーロッパ人司祭は説教に当たって、まず古典を参照しながらラテン語で原稿を作り、それを日本人修道生などの協力のもとに日本語に訳した。その際に利用されたのがこの辞書であり、そのために卑語も方言も含まれず、使用の日本語は文語であった。なお同年には、アノエル・アルヴァレス著『ラテン文典』に日本語の活用を併せ解説した日本語版が天草で出版されている。⁽²²⁾

当時司祭の要務は、告解を聴くこと（聴罪）と説教であった。そのため、司祭にはあらゆる種類の日本語に広範に精通することが求められた。それに応えるために、日本語・ラテン語辞典の出版が急がれた。1590年代の終わりに辞書の編纂が始まり、1603年に『日葡辞書』が、翌年には「補遺」が続いて印刷された。これは、キリシタン宣教師による日本語研究の一つの頂点と評価されている。⁽²³⁾

(1) - 1. 『日葡辞書』

『日葡辞書』は1603年から1604年にかけて、長崎コレジオで印刷され、用語は日本語とポルトガル語で、書体はローマ字であった。同辞書は1595年天草で印刷された『羅葡日辞書』をもとに作成されたもので、『日葡辞書』序言の中に次のようにある。「今日は、キリスト教に対する迫害がひどくて、パアドレや日本人イルマンたちは以前よりも若干の時間的余裕が生じたので、年来不完全ながら存していたこれらの辞書（1595年天草版羅葡日対訳辞書など）を見直し、一層よく検討することができるようになった。そこでわれわれは、日本語をよく知っている者のうち何人かが、日本語に精通している数人の日本人の援助を得て、この辞書を検討増補して完成するために、数年の間精励して事に当たるようにしたのである」と。⁽²⁴⁾日本語に精通しているヨーロッパ人が、日本語に精通している日本人と共に編纂した同辞書は、

ヨーロッパの辞書に日本の文化が吸収された形となっていて大変に興味深い。

『日葡辞書』の冒頭の全頁には、「イエズス会のパアレたち及びイルマンたちによって編纂され、ポルトガル語の説明を付したる 日本語辞書 教区司教ならびに上長たちの許可のもとに、日本イエズス会の長崎コレジオにおいて 1603年⁽²⁵⁾」と書かれている。まさに多くのパアレ、イルマンたちの長年の研鑽の集大成であった。

本篇と補遺をあわせた丁数は402（804頁）、見出し語は、本篇25967語、補遺6831語である。両者の重複を除けば総数は32293語に達する。動詞の標出には『羅葡日辞書』の様式に準じて、語根、現在形、過去形を連記し、また『日葡辞書』は話し言葉を主体とするが故に、口語の活用に基づいていた。同辞書では、類義語や異義語・対義語を並列している⁽²⁶⁾。

当時、日本では近畿に対して九州と関東は、著しい方言差を有する地方として知られていた。従って、九州地方を布教の中心としてきたイエズス会は、これらの地方の言葉に重大な関心を持ち、近畿方言を Cami（上）、九州方言を X.Ximo（下）と標して取り扱い、上（ミヤコ・都）に対比させた九州方言について指摘している。方言注記のあるものは465語、その大部分は下地方の語が占める。その6割以上は名詞で、動詞は約100語である⁽²⁷⁾。

卑語については、B（Baixa 下品な）などで注記し、卑語な語であることを明示した例は約90である。方言や卑語は言語の性格に基づいて宣教師の使うべきでない言葉とされた。また宣教師の立場から避けるべき特殊語の一つは、女性語（Palaura de molheres）で、約110語に注記がある。その多くは女房詞と呼ばれるものである。仏法語については、当時仏教はキリスト教と対立関係にあったので、慎重に対処している。明確な仏教用語については採らない方針であったが、一般に通用している仏法語 Bup.（Buppo）と注記して約150語取り上げている。その他に、文書語主として漢語、また詩

歌語主として和語などの注記がなされている。⁽²⁸⁾

同辞書の特色の一つとして、前述した如く方言、卑語、女性語、仏法語等の豊富さが挙げられる。これらを通して、日本の都に対する地方の存在や、社会の暗部や、社会の一方を支える女性の存在や、日本人の行動様式を支える規範等、日本の社会文化を広範囲に吸収している。

(1) - 2. 『日本大文典』

『日本大文典』は1604年から1608年にかけて長崎コレジオで印刷され、用語は日本語とポルトガル語で、書体はローマ字であった。『日葡辞書』(1603～1604年長崎印刷)と同時に企画され、それぞれ分けて編集が開始されたとも言われている。⁽²⁹⁾

同文典はジョアン・ロドリゲスによって編纂されたもので、三巻印刷された。第一巻は動詞など屈折論、品詞論、第二巻は文章論、修辞論、第三巻は文体論、人名論、計数論等である。アルヴァレス著『ラテン文典』(1595年印刷)を規準とし、文法的範疇や文法の基本的概念についてはアルヴァレスの学説用語を遵守しながら、文法現象はあくまでも日本語の事実を尊重する態度を堅持し、ラテン的と日本的との二元的立場に立ったものである。ロドリゲスはラテン語の文法的範疇では処置しがたい事象があることを認めて、その文法的事実を日本語の「表現法、言い方」と呼んで随所にその具体例を挙げて示した。また、彼は日本語の系統的分類に及んで、固有語を「よみ」、⁽³⁰⁾字音語を「こえ」と呼び分けている。

他方ロドリゲスは、敬語や人名に付する尊称、呼称が非常に発達していること、特殊な接続法のあることなどを述べて、言語的優秀性も示している。⁽³¹⁾なお敬語に関しては、敬語を、相手や話題の人物の身分の高下に応じた語の使い分けによる尊敬、丁寧の表現であるととらえ、さらに敬語表現と対蹠的な見下げや軽蔑表現についても言及している。彼が待遇表現を重視している

ことがわかる。彼がもう一つ重視していたのは、書状における書き言葉である。同文典のなかで「書状に於ける書き言葉の文体は、簡潔という点においても、又助詞や成語の特有なものがある事に於いても、他の書き言葉とは大いに違っている」と指摘している。厳格な身分制、面子や儀礼を重んじる社会では、古文書の書き方、読み方は、一段高い言語能力として評価されていると考えていたからであろう。⁽³²⁾

同文典は、単なる文法書ではないと評価される。それは、本来の言語学的な価値以外に、「標準語と方言の発音法」、「話し言葉と書き言葉」、「書状の礼法」、「人名論」、「数詞の用法」、「計数論」（主として第三巻）といった、日本語の極めて多方面にわたる有益な情報が含まれているからである。当時、日本の首都であつた京都で話されていた標準語と、布教活動の中心地九州の方言の間には、著しい相違があり、この事実を重要視したロドリゲスは、数章をこの問題に充てた。宣教師たちが、京都の公家の言葉も、九州の一般庶民の言葉も理解できるようにとの配慮である。ロドリゲスはまた、日本の詩歌の概説をしたり、『平家物語』（90例）、『イソップ物語』（40例）、『論語』（40例）を引用したり、さらには日本の地理と歴史に関する数章も収めている。⁽³³⁾

（2）日本語に対する見解

ヴァリニャーノは「日本諸事要録」第二章「日本人の他の新奇な風習」において、以下のように日本語に関して述べている。

「彼等のことごとくは、ある一つの言語を話すが、これは知られている諸言語の中でもっとも優秀で、もっとも優雅、かつ豊富なものである。その理由は、我等のラテン語よりも（語彙が）豊富で、思想をよく表現する（言語だ）からである。同じ一つのものを意味する名称が数多くある。上に、彼等の名誉を重んずる優雅な天性により、すべての人、及びすべての事物に向

かつて同一の名詞や動詞をもってすることは許されず、対応する相手の人物や事物の階級に応じて、高尚、低俗、軽蔑、尊敬の言葉を使いわけなければならない。口語と文語は異なるし、男女は非常に異なった言葉を話す。書く言葉の中にも少なからぬ差違があつて、書状と書物とでは、用語が異なる。つまり、これほど種類が多く優雅であるので、それを習得するのは長期間を必要とする。彼等の慣わしとなっている言葉と異なる話し方や書き方をすれば、嘲笑と侮蔑的となるのであり、それは我等がラテン語で言葉を逆にし⁽³⁴⁾たり、格を誤ったりするようなものである」。

さらにヴァリニャーノは自著『日本におけるキリスト教の起源とその発展』の中で次のようにも述べている。

「(中略) その他にも敬意を持った助辞や動詞を使わないで儀礼を表す方法がある。それは第一人称を自身で使うのには如何なる場合も常に普通の語か卑下した語かを使って、話さねばならない。そうすることによって、敬意を持った語は他人を尊敬するためにのみ使われることになるのである。また、話題とする人や事物に応じて、敬意を持った語や助辞を使わねばならない。話し相手とする人ばかりでなく、話題とする人や事物について敬意を示すのであつて、それらに応じて、普通の動詞か敬意を持った動詞かを使わねばならないのである。かくして日本語は、その性質上、言語そのものが礼儀と立派な躰とを人々に教えるのである」⁽³⁵⁾。

ここにヴァリニャーノの日本語観が表現されている。一つには、日本語の最大の特徴は敬語の発達であるということ、二つ目は、日本語は豊富で優雅であるが、一方敬語が複雑であり、口語と文語、あるいは男女間の違いなどがあつて、習得が容易ではないということ、三つ目は、敬語は礼儀・作法を含めた振る舞いとしてトータル的に捉えなければならないことである。⁽³⁶⁾

ヴァリニャーノの日本語特に「敬語」に対する関心は、やはり「布教の為」という目的がその背景にあるように思えるが、それを通して「日本語は

豊富で優雅である」と捉える点からは畏敬の念や賞賛といったものが読み取れる。また日本語は「礼儀・作法を含めた振る舞い」と捉える点からは、彼の学者としての関心さえも読み取れる。

前述の教育機関において、広範な教養を身につける為にまた布教の為に日本語を学習する点を指摘したが、ヴァリニャーノは「日本諸事要録」第十四章「イエズス会に受け入れるべき日本人、並びにその試練と教育法」、第十六章「日本人修道士、及び同宿と、我等ヨーロッパ人宣教師の間に統一を維持する為の十分な注意と方法」において、ヨーロッパ人にまして日本人が日本語を学習するもう一つの意義を次のように述べている。

「日本語は、きわめて優雅であり豊富であって、話すのと書くのと説教するのは、それぞれ言葉が異なるし、貴人と話す場合と下賤の者と話す場合では言葉を異にする。このような多様性は、漢字の上にも無数あって、書くことを学ぶのは不可能であるし、人に見せられるような書物を著すことができるようになることは、我等の何びとにも不可能である。（中略）彼等は日本語を書いたり話すことをすべて知っており、その土地の出身者として、これを深く学び練習することができる。これは外国人である我等の何びとにも到達できないことで、我等はいかに学んでも、言語に関しては彼等に比べると子供のようであり、書くことを知り、著述はおろか書物をよく理解することさえ到達できない⁽³⁷⁾」と。

ヴァリニャーノは極めて客観的に日本語を観察しているが故に「外国人である我等の何びとにも到達できない」と述べているのであろうが、彼の人間性の一端である謙虚さや正直さも表れている。なおヴァリニャーノ自身と日本語学習との関係について、村田昌巳氏によると、哲学や神学を学んだ学生時代よりも熱心に日本語学習に取り組んだという分析結果があるが、大変に興味深い⁽³⁸⁾。

3. 同宿の導入

(1) 修道士、同宿に対する評価

日本人が宗教に対していかに優れた素質を有するかについてはすでに述べた。それでは実際に信仰実践に関してはどのように見ていたのであろうか。ヴァリニャーノはそれらについて、信仰実践を行っている日本人修道士や同宿を通して一つの見解を述べている。彼は「日本諸事要録」第十四章「イエズス会に受け入れるべき日本人、並びにその試練と教育法」⁽³⁹⁾、第十五章「同宿とその性格、並びに日本においてこれを欠くことを得ない理由」⁽⁴⁰⁾において述べているが、要約すれば以下のように言うことができる。

第一に、彼等（日本人修道士や同宿）は日本語を書いたり話したりするすべてを知っており、その土地の出身者として、これを深く学び練習することができる。更に彼等は、キリスト教徒に必要な書籍を翻訳することができる。今まで著されたものは、すべて日本人修道士の手によるものである。

第二に、我等と日本人は、その習慣、生活態度をはなはだしく異にし反対とするから、同じ日本人を仲介としなければ、仏僧達のように必要な心の融和や、親睦、権威を獲得できない。日本人はイエズス会に入会し、今日まで外国人の宗教と思われないように、日本人に合致した自然な方法で行っている。

第三に、イエズス会は日本人修道士の手によらねば、確乎たる根を日本（の社会）に下ろさなかったであろうし、その生活に必要な収入も手段も得られなかった。

第四に、修院で育てられた同宿は、カトリック要理を教えたり、説教したり、あるいはその他の仕事をするのに役立った。彼等は、日本の習慣や生活方法を知らない司祭に代わる説教者であり、司祭の案内人となっていた。深い精神生活に到達する方法も機会もなかったが、それにもかかわらず、彼等

は期待しうる以上の大いなる成果をあげた。彼等は、言語を知っているから、司祭よりもその説教においてははるかに優れ、日本人は彼等の説教の方を喜ぶので、彼等がいるところでは、司祭は稀に説教するだけであった。

ヴァリニャーノは何度も「同宿」と言う言葉を使い高い評価を与えているが、ここで言う同宿とはどのような者なのであろうか。同宿とは将来僧侶になる為に、僧院の中で育てられた若者であり、頭髪を剃り、僧侶と異なっているが、同様に長衣を着用していた。当時、同宿は仏僧の間では低い階級であるが、ある手段によって修練中で、僧侶になることを希望しており、宗教家として認められ、大いなる特権を有し重視されていた。

当時、イエズス会の教会には大勢の同宿がいた。イエズス会の修道士でないことは周知のことであるが、彼等の中の多数の者は、修道士になる為に育てられていた。日本人の間では評判が良いので、修道士が不足している為に、宣教師のもっとも重要な仕事すら手伝っていた。多くの司祭達は彼等を頼りとしており、彼等を徳操に導くよう努力もしていた。

同宿は通常、誓願を立てていない（この点が修道士との決定的な違い）し、イエズス会に対するその他の義務を有しないが、司祭が適当であると考えた場合には、イエズス会に入会の誓願を立てる許可を与えられる者もある。彼等は（教会を）出たい時には出ることができるし、司祭も自分達の考えだけで、誰にも相談せずに彼等を修院から出すこともできた。しかし同宿は、司祭にとってきわめて有利、かつ必要であり、彼等がいなければ司祭は日本で何事もなし得ないのも現状であった。教会の世話をし、司祭達の為の交渉の文書を取り扱い、茶の湯の世話をするのも彼等であった。

（2）同宿の導入の意味

同宿は、本来仏教用語の同宿に由来している。前述の如く、イエズス会士によると、同宿は寺院で僧侶に仕える若者または剃髪した者で、俗世間か

ら離れ、人々から宗教家と見なされていた。当時、イエズス会の教会やイエズス会の教育機関にも、これと同様の同宿が大勢いて、彼等の中の多数の者は、修道士になる為に育てられていた。日本人の間では評判が良いので、修道士が不足している為に、宣教師のもっとも重要な仕事すら手伝っていた。即ち、仏教用語の同宿が、イエズス会に導入されていたのである。⁽⁴¹⁾

同宿という用語がイエズス会関係の史料で最初に出てくるのは、1580年にヴァリニャーノが記した「上長のための規則」とされており、彼が用語の導入に関係していたと言われる。ヴァリニャーノが、日本の習慣や礼儀作法に自分たちを適応させるという「順応方針」を採用した結果である。この用語が導入される以前から、イエズス会士に同伴して協力した日本人は存在していた。例えば、山口の琵琶法師であったロレンツはザビエルに同伴し、通訳や説教を行っていて、こうした者が同宿の原型となっていたと言われる。⁽⁴²⁾

「順応方針」に沿って同宿を導入したのであるが、それに対してはイエズス会の中から否定的な意見も提起された。同宿は本来イエズス会に見られないものであるため、同会の遵守すべき行動様式に反するものであるとの批判である。これに対してヴァリニャーノは、同宿の必要性を強調し導入せざるを得ない現状を述べて反論している。⁽⁴³⁾

なお（仏教の）同宿については、仏教の視点からは次のような評価がなされている。即ち、時代を遡る初期の段階では、仏道を求める純粋な僧であったと思われるが、次第に寺社の雑務をしながら生計を立てる半僧半俗の下級坊主となっていた。しかしそれは、庶民との触れ合いを生み出し、仏教の浸透化へ大きく貢献したことも忘れてはならない。⁽⁴⁴⁾この視点は、イエズス会の同宿が日本人の間で評判がよいとか、彼等の説教を喜んでいる等とから考えると、キリスト教の庶民への浸透化に少なからず貢献があったと考えていいように思える。

それでは同宿の存在をどのように考えればよいのであろうか。森脇優紀氏

は次のように述べている。

「このようにドウジュク（森脇氏は仏教における用語の同宿と、キリスト教における用語をドウジュクと区別している）は、イエズス会の会員ではないがイエズス会士と共に生活をしており、会が当然守るべき行動様式に当てはまらない日本の『特殊事例』であった。そしてその主な役割は、イエズス会士と生活を共にし、教理教育や説教、ミサや洗礼の補助をすることであった。しかしその一方で、彼らはイエズス会士ではなく、聖職者でもなかった。つまり、ドウジュクは『聖』の存在であり、かつ『俗』の存在でもあったのだ。そして同時に、守るべき行動様式がある一方で、必要性からその特殊性を認め、それに適応せざるをえなかったというジレンマを、イエズス会の中に生み出すこととなったのである」⁽⁴⁵⁾。ここで述べている「特殊事例」その捉え方自体が、すでに相対的な見方に立っており、なおかつそこに「聖」と「俗」の側面を見出した点に特に注目したい。この視点はヴァリニャーノの「適応主義」に関する議論に有益な視点を提供しているからである。

近年イエズス会が「適応」を「道具」として用いたと論じ、その視点を強調するレンゾ・デ・ルカは「今までよく使われてきた『適応主義』という表現は、宣教師たちが文化交流を宣教手段としていた要素が薄れる」との考えのもと、「宣教道具」という表現（新用語）を提案している。この見解に基づくと、ヴァリニャーノの順応方針に沿って導入された同宿は、宣教道具ということになる。確かに、現実的な必要性から高く評価をして導入したという側面はあるが、狭間芳樹氏も言うように「一方で非西洋世界を野蛮と斬って捨て現地文化を絶滅して恥じない大航海時代にあつて、ヴァリニャーノのこの視点が卓越したものであったことも忘れてはならない」⁽⁴⁶⁾。ここでもう一つ重要な視点は、同宿の有する「聖」と「俗」の二面性であろう。即ち、もし同宿の中に「聖」の側面を認めていたならば、宣教道具という表現は相応しくないように思われる。

またヴァリニャーノの「適応主義」に関しては、高瀬弘一郎氏も「ヴァリニャーノは自他共に認める適応主義の旗手と評されるけれども、その実、彼の日本理解には限界があったと言わねばならない。日本の実情により深く踏み込んだ“適応”と言うなら、それはむしろ、ヴァリニャーノの後継者たるフランチェスコ・パシオによって実行に移されていったと言ってよい」、「パシオによって行われた喜捨受納に関する規定の改変は、宗教性のある事柄に対する適応という観点から取り上げることのできる、ほとんど唯一と言ってよい事柄」であると指摘し、ヴァリニャーノの“適応”は宗教的習俗以前の段階の適応であると捉えている。⁽⁴⁷⁾

これに対して狭間氏は、「宗教性のある事柄」という場合の「宗教性」と「非宗教性」、換言するなら、聖と俗との二分化については現代宗教学において議論を要する問題でもあり、パシオ以前の適応が「宗教的習俗以前の段階」であるか否かについては検討の余地が残されているように思われる、と述べているが傾聴に値する見解である。前述の同宿の導入一つ取り上げても「聖」と「俗」の二面性を有しているからである。⁽⁴⁸⁾

4. ヨーロッパ人と日本人との統一（融和）

（1）統一（融和）への方策

ヴァリニャーノは、日本の布教事業を前進させる上で、多くの困難があるが、その最大のものは、日本人修道士及び同宿と、ヨーロッパ人宣教師の間に統一（「日本諸事要録」では“統一”という言葉を使っているが、内容からするとむしろ融和の方が適切であろう）を維持することであるとの現状認識をもっていた。そこで統一の課題に関して、「日本諸事要録」第十六章「日本人修道士、及び同宿と、我等ヨーロッパ人宣教師の間に統一を維持する為の十分な注意と方法」⁽⁴⁹⁾、第十八章「日本人を統轄する為に採用すべき

方法」⁽⁵⁰⁾の中でその方策を述べている。要約すると次のように言うことができる。

まず彼は統一がない場合の主たる4つの弊害を挙げている。

第一は、統一がないところでは、一切のものは破滅する。

第二は、彼等が居なければ、我等は日本で生活することも、何をするともできないのであるから、彼等が多数我等の修院に入って来て、もし不統一に生活するとなると、いかなる結果になるかは明白に想像される。

第三は、将来彼等が学んで司祭になった時に、その多数の者が我等やイエズス会に対して、彼等の思う通りに行動することは疑いない。

第四は、我等が彼等に同調し、彼等が我等に同調しなければ、精神的な融合はあり得ず、それなくしては、日本の存在する数多の悪徳に関する危険や機会を克服する力をもつことができないので、イエズス会は簡単に破滅するだろう。

彼はまず弊害を挙げた上で、次に統一を維持する方策を5点に分けて提起している。

第一は、イエズス会に入る日本人を、あらゆる点でヨーロッパ人修道士と同様に待遇し、同宿もその身分に応じて同様に扱う。なぜなら、イエズス会の内部において、修道士の待遇上の不平等ほど統一と兄弟愛を破壊するものはないからである。

第二は、イエズス会の会則に応じて、温和と愛情をもって日本人を待遇し、統轄し、徳操と宗教的贖罪を教えるよう努力する。そして全て彼等の幸福と利益の為に努力していることを理解させる。

第三は、我等の規則を厳格に遵守し、日本人の習慣、儀礼、感覚に悪い感情を抱いたり悪口を述べたりしてはいけない。

第四は、日本人の習慣、儀礼、態度、挙動は最上のものなので、我等がそれらを習得し、喜んで遵守してこそ、最大の統一と最大の結果が得られる。

主なる神の愛により、我等は日本人に援ける為に、郷里を棄て、幾多の苦勞を経て來たのであるから、我等が日本人に順応するのを嫌うことによって、成果や事業を破壊させてはならない。

第五は、我等はヨーロッパ人の嗜好を放棄し、自らを制して彼等の嗜好に合わせ、彼等の食物に適応しなければならない。

彼はさらに上長に対しても、日本人を統轄するに際しての三つの努力目標を提起している。まず第1点目は、修道士も同宿もイエズス会を愛し、我等の修院で喜んで生活するようにさせること。そしてその為には、ヨーロッパの諸条件や態度、行為によって彼等を導こうとはせずに、彼等の条件なり方法によって待遇することが必要である。だから当初は深い愛情をもって優しく待遇し、常に温和、かつ鄭重に話し、彼等を訓戒し譴責する場合にも、怒って礼を失した言葉で物を言うことを慎まねばならない。

彼等は怒りを抑制することを大きい誇りとし、激昂して発した侮辱的な言葉には当然堪えられないので、上長が侮辱的な言葉を修道士に用いると、彼等は悲しみ、その上長を教養なく、徳の低い、下級の人物と見なすことになる。彼等は天性正直で、面目を重んじるから、上記のような行為は彼等の心を害すが、彼等を信頼と名誉をもって遇するならば、良き授けとなる。

衣食、その他必要な物の取り扱いについても十分な注意を払い、日本の習慣に従って（最高の適応）、清潔にせねばならない。必要な場合には、十分彼等を処罰せねばならぬ。しかしすべてこれは、感情によって対処していると思われるような方法ではなく、彼等自身の利益と他の人々の幸福の為であると思われるようにし、まず道理によって納得させ、彼等自身の中に、そのような処置を受ける理由があることを知らさなければならない。

第2点目は、精神を体得させ、徳と学問に進歩させるようにすること。そしてその他さらに進歩の為に採らねばならない方法は、彼等が心を触れ合いたいと考えることについては、ことごとくこれを教え、説得することであ

る。彼等は生来その性格は萎縮的で隠蔽的であるから、心を触れ合おうという気持ちを起こさせ、納得せしめることが必要である。もし彼等を深い愛情、温和、思慮をもって待遇せず、この心の融和を容易にしなければ、彼等は萎縮して、私達にはその胸中が理解できないまでになり、それが為に彼等はほとんど進歩しないようになる危険がある。（中略）苦行の真の方法は、自身が苦行し、欲望を抑制することを望むように人々の心を動かし、納得せしめることである。この方法については、前述の通り、日本人は道理によって統轄し教育することが必要である。

第3点目は、ヨーロッパ人の我等を愛し、我等と十分に統一を保って生活するようにさせること。我等が日本人の風習に従うならば、彼等は直ちに我等に同調し、彼等は我等に愛情を抱くようになるだろう。従って、この点において欠如する危険があるとすれば、彼等の側よりは、むしろ我等の側である。すなわち、彼等はいかなることにしても、その風習は放棄しないのであるから、すべて我等の方から彼等に順応せねばならず、それは日本では必要なことであり、我等は大いに努力せねばならない。ある場合には彼等は天性までも変え、大いなる苦しみによってそれをなすのであるから、この統一のために必要なことを行う困難は、我等の側にあって日本人の側にはない。

以上のことからヴァリニャーノの基本的な態度は、以下のようにまとめることができる。即ち①平等な立場に立つこと、②温和と愛情をもって接すること、③日本人の習慣、儀礼を尊重し学習しそれに適応させること、④融和を実現させる為に、ヨーロッパ人が日本人に同調し、それを通して日本人の同調を引き出すこと。

このヨーロッパ人と日本人の統一の問題は、ヴァリニャーノが来日する前からすでに発生していた。2代目の布教長となったF・カブラルは、日本人に対し偏見をもち、日本文化を理解しようとせず、布教方法は根本的に異なっていた。ヴァリニャーノは日本布教の状態とカブラルの態度を以下の7

項目にまとめている（1595年の書簡⁽⁵¹⁾）。

第一に、カブラルは日本人修道士の指導方法に関しては、彼等は自尊心の高い国民であるから、厳格に取り扱わねばならないとして、彼等を黒人で低級な国民と呼び、他の侮辱的な表現を用いた。彼はしばしば彼等に向かい、「結局のところ、お前達は日本人である」と言うのが常で、彼等に対し、彼等が誤った低級な人間であることを理解させようとした。かかる態度を日本人は極めて嫌悪した。

第二に、日本人修道士は、ポルトガル人修道士とまったく異なっており取り扱われ、彼は彼等がヨーロッパ人修道士のような衣服や帽子を被ることを望まず、食事、睡眠、その他総てのことで異ならしめた。かかる待遇が彼等とヨーロッパ人の間に不一致を招来した。

第三に、彼は日本人を我等の習慣に、そしてポルトガル人を彼等の習慣に順応させるべきではないとした。彼によれば、彼等は黒人であり、まったく野蛮的な風習を持っているというのであった。彼はその後も、日本の風習に順応せず、高い机で食事をし、テーブル布やナフキンを使用させたが、それらははなはだ不潔であった。日本人は食堂、台所で清潔を好むので、彼を不潔と見なし、嫌悪した。

第四に、彼は日本の風習を常に親しめぬものとし、これを悪し様に言った。彼の周囲も日本の風習を嘲笑し、自らの風習を優れたものと見なしていた。これは日本人を立腹させた。

第五に、彼は日本人修道士が、ラテン語やポルトガル語を覚えることを許さなかった。ポルトガル語の学習を許さないのは、ヨーロッパ人の会話が判らぬよう、我等の間の秘密が覚えられぬようにする為であった。ラテン語を習わせないのは、彼等に学問をさせず、彼等の中から司祭になる者が出ないようにする為であった。

第六に、彼は日本人には大いに悪徳に走る傾向があるとして、日本人の為

の神学校を作ることを決して許さなかった。

第七に、彼は日本語を、我等が良く学ぶことのできない、また文法によっても判らないものとし、日本語で説教することは縁遠いものと考えた。事実、彼は布教長として13年間過ごしたが、ほとんど学ぼうとしなかった。また彼は、人々が文法によってそれを学ぶように配慮しなかった。

以上を通して見えてくるカブラルの基本的な態度は、次のように言うことが出来る。即ち、日本人に対する偏見（その風習は野蛮的、或いは劣っている）から、日本人は低級な国民、ヨーロッパ人は優れた国民と見なし、それが故にヨーロッパ人と異なる扱いをし、日本の風習にも順応しようとせず、日本人から司祭が出ることを望まなかったのも、日本人に学問をさせず、ラテン語の学習もさせなかった。

高井喜成氏はこのカブラルとヴァリニャーノの態度を比較して次のように述べている。即ち、カブラルの方針は、自己の保持するヨーロッパ感覚的尺度で日本布教、もしくは日本の風習等を洞察しており、日本人を下に観る形のもので、彼の方針は「同化的方針」であると言えよう。一方、ヴァリニャーノの方針は、日本のように「異質な世界」で、他者に歩調を合わせることを嫌う国民の中にあって布教するためには、その国民の生活方法・習慣・言語等を習得して、その社会の風土・文化に順応する方法で布教することを考えたことから、順応的方針⁽⁵²⁾と言える。

さらに、井出勝美氏の見解を借りれば、「カブラルその他のパードレが、日本人の好ましからざる性格を天性のもの natural 即ち、スコラ学の用語を借りて表現すれば、本質的なもの *Essentia* と見なしたのに対し、ヴァリニャーノは、それは本質的なものではなく、偶性的なもの *Accidentia* つまり何らかの歴史的条件下に形成されたもの、従って暫定的、矯正可能なものと信じた点にあった」と言うことになり、その両者の相違は明確であった。⁽⁵³⁾

カブラルとヴァリニャーノの日本人にたいする見解の相違は、マカオにコレジオを創建（1594年）する際にも表面化した。ヴァリニャーノは日本人司祭の養成の為に、マカオにコレジオを創建する計画を立てた。それには当初から多くの反対意見があった。その諸理由を「ゴアで開催されたパードレたちの協議会において、イエズス会のコレジオをマカオに創建すべきでないとされた諸理由」（1594年頃と推定）に基づいて整理すると次の4点にまとめられる。1点目は経済基盤の問題、2点目は人材不足によりマカオ独自で維持できない、3点目は日本人の国民性及び資質の問題、4点目はマカオでは教育の効果が期待できない、の4点である。高瀬弘一郎氏は主たる理由は2点目と3点目であると述べているが、3点目の反対理由は整合性がないと結論付けている。なぜならば、その主張を貫くならば、日本人のためのコレジオを創建すること自体一切反対ということになるからである。また高瀬氏は、上記協議会は東インド管区長カブラルの主導下に開催され、彼の意向に沿って結論が導き出されたものと判断してよいと考えている。ここでも両者は鋭く意見が対立している⁽⁵⁴⁾。

（2）文化対話主義への萌芽

前述のカブラルとヴァリニャーノ両者の日本人や日本の風習に対する態度の違いは、まさに「自民族中心主義」と「文化相対主義」の違いを想起させる。カブラルはヨーロッパ感覚的尺度を中心として、日本人や日本の風習に優劣をつけるが、ヴァリニャーノは日本人の習慣、儀礼を認め尊重し学習しそれに適応させ、さらに日本人との融和を実現させる為に、ヨーロッパ人が日本人に同調し、それを通して日本人の同調を引き出そうと努めている。

ヴァリニャーノが立脚していると考えられる文化相対主義は、自身の文化が最高であるとする「自民族中心主義」を克服しようとして生まれた概念で、諸文化に対して、自身の文化を中心に優劣をつけるのではなく、相対的

に多様性を認めることが必要であると主張する⁽⁵⁵⁾。しかし、同主義には以下の問題点が指摘されている⁽⁵⁶⁾。①単に「相互に文化を認める」に留まるならば人間の絆を分断する差異と働く一面を払拭できない。②認識的な「消極的寛容」では、対立発生時には吹き飛んでしまいがちな脆弱さを払拭できない。③自己の集団のみを絶対視する閉鎖的「排他主義」を払拭できない。④人間の積極的な意志が伴っていないために、文化の違いが自民族中心主義に転化する危険性をもつ。これらの問題点に関してヴァリニャーノの場合は、彼は日本人や日本の風習に対しまずそれを認め尊重し積極的に順応し、布教の為に積極的に活用していった点から考えると、むしろ文化相対主義がいい方向に働いていったものを考えられる。

近年、この文化相対主義の問題点を克服しようと新たに「文化対話主義」が提唱されてきた。同主義を提唱している池田大作氏は次のように述べている。「これからの人類は、互いに敬い、学び合いながら、共に繁栄しゆく大同の世界を目指していくべきである。そのためには、開かれた自発的な交流を旨とする『文化対話主義』ともいうべき新しい段階へ、進んでいきたいと思う」と⁽⁵⁷⁾。

同主義は、池田氏が杜維明氏との文明対話の中で提起されたものであるが、その際、杜氏は同主義を構成する一つの要件として「自発的な参加者」を挙げている。杜氏はその具体的な内容を次のように述べる。「創造性ある『調和』を創り上げるためには、関連する当事者たちが、相互理解と相互援助のための共通の基盤を構築する、協力的な大事業における『自発的な参加者』にならねばならない」と⁽⁵⁸⁾。この第一の要件に関して言えば、ヴァリニャーノはヨーロッパ人と日本人との融合を図ろうとし、しかも布教の為に使命感に立っており、「自発的な参加者」そのものと言うことができる。

池田氏はさらに二つの要件を挙げている。その一つは「創造的対話」である。池田氏は「敵と見方」や「善と悪」といった二元論による分断化が引き

起こした諸問題を克服する為に、仏法の「善悪不二」の視点からの克服を試みて、次のように述べている。即ち「仏法では『善悪不二』といって、すべての人間の生命には、潜在的に『善悪』の両面が具わり、縁に触れて善にも悪にも転じると教えている。ゆえに、自他共に、内なる『悪』の発現を抑え、『善』を薫発しゆく、生命の練磨作業こそが、創造的な『対話』の真の姿である」と。⁽⁵⁹⁾ここにおいては、「善悪不二」に基づいた、自他共の生命の練磨作業を通して、創造的な「対話」を形成しようという提案が読み取れる。

それでは、具体的にどのようにすれば、内なる「悪」の発現を抑え、「善」を薫発しゆくことができるのであろうか。これに対し池田氏は更に次のような示唆を与えている。①自己を省みながら、相手の善性を信じて呼びかける、このような「対話」を通して、まず自己を統御し規律する力を練磨する(自己の変革)、②そしてそれを通して相手の善性を引き出していくということである(相手の変革)⁽⁶⁰⁾。この第二の要件に関しては、ヴァリニャーノの以下の態度、即ち、「我等が日本人の風習に従うならば、彼等は直ちに我等に同調し、彼等は我等に愛情を抱くようになるだろう。従って、この点において欠如する危険があるとすれば、彼等の側よりは、むしろ我等の側である」は、池田氏の言う「創造的対話」と言うことができる。

もう一つの要件は多様性を活かす「精神のグローバル化」である。これは「自発的参加者」が寄って立つ精神土壌とも言うことができる。具体的には①縁起的発想、②アイデンティティーの多層化を挙げている。

①縁起的発想：縁起観に立つと、いかなる物事もたった一つだけで成り立つということはなく、すべては、互いに依存し、影響し合って成立することになる。池田氏はこの考え方を発展させて「この発想からは、人を排斥するという考え方は生まれない。むしろ、他者をどう活かすか、よりよい人間関係をどうつくり、いかに価値創造していくかという思考に立つはずで

ある」と述べている。⁽⁶¹⁾この点に関しては、ヴァリニャーノが同宿を導入したことに顕著に現れている。同宿の果たしている貢献を認め、彼等の役割、即ち説教や司祭の案内役等を最大限に役立てていった。

②アイデンティティーの多層化：池田氏は牧口常三郎の「郷土民」「国民」「世界民」思想（一人の人間はこの3つの自覚を併せ持つべきである）に触れながら、「人間のアイデンティティーを『民族』や『人権』などの特定の観点から限定するのではなく、多元的な視点をもってアイデンティティーの視野を広げていく。そして、同じ『人間』という共通の土台に立って、共に『良き隣人』『良き市民』『良き地球人』として生きてゆくこと」の重要性を強調している。⁽⁶²⁾この点に関しては、ヴァリニャーノの次の言葉の中に反映されている。即ち、「主なる神の愛により、我等は日本人に援ける為に、郷里を棄て、幾多の苦労を経て来たのであるから、我等が日本人に順応するのを嫌うことによって、成果や事業を破壊させてはならない」から考えるに、彼のアイデンティティーはすでに多層化していると言って過言ではない。

5. むすび

ヴァリニャーノは日本人司祭養成の為に、セミナリオやノビシアードやコレジオといった教育機関を設置し、教育内容の中に異文化である日本文学、例えば『平家物語』、『太平記』、『和漢朗詠集』や日本語も取り入れた。さらにヨーロッパ人のイエズス会士に日本語の学習を勧め、その為の『日葡辞典』や『日本文典』そして日本語学習用のテキスト『平家の物語』、『金句集』等も準備している。

布教にとって大きな役割を果たしたと考えられる異文化受容は、同宿の導入であろう。イエズス会として遵守すべき行動様式がある一方で、必要性からその特殊性を認め適応せざるを得なかったという矛盾を抱えての導入で

あった。従って「聖」と「俗」の共存する特殊事例を受容したことになると言っても過言ではない。

これらの異文化受容は、「布教の為」という宗教的使命感以外に、ヴァリニャーノの日本人や日本文化にたいする態度が大きく影響したと考えられる。当初はヨーロッパと全く正反対の様相に驚嘆するが、次第に関心や興味を示し、更には畏敬の念に変わり賞賛するに至っている。『日葡辞典』や『日本文典』発刊は布教の為だけでなく、日本人及び日本文化という異文化に対する所謂学者としての好奇心もその背景にあったと考える。同宿の導入について言えば、彼等の働きに対する大きな評価さえも現れている。

ヴァリニャーノの異文化受容は、まず異文化を認め、畏敬の念をもち尊重さえもし、その上で積極的に受容し、結果的に新しい価値の創造に繋がっていった。その態度の中には「文化対話主義」の萌芽さえ見受けられる。

注

- (1) 『新カトリック大事典』研究社1998年1月 p413、p441
- (2) 五野井隆史『キリシタンの文化』吉川弘文館2012年7月 p104
- (3) 『新カトリック大事典』前掲 p413
- (4) 『新カトリック大事典』前掲 p413
- (5) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 pp115-116
- (6) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 pp118-119
- (7) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 p105
- (8) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 pp123-124
- (9) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 pp131-132
- (10) 松田毅一『日本巡察記』東洋文庫229平凡社1988年12月 pp 5-14
- (11) 松田毅一『日本巡察記』前掲 pp15-27
- (12) 松田毅一『日本巡察記』前掲 pp96-99
- (13) 松田毅一『日本巡察記』前掲 pp93-94
- (14) 松田毅一『日本巡察記』前掲 pp227-228
- (15) 松田毅一『日本巡察記』前掲 pp5-14

- (16) 松田毅一『日本巡察記』前掲 pp15-27
- (17) 高井喜成「キリシタン布教活動についての一考察」『佛教大学大学院研究紀要』第11号1983年3月 pp83-84
- (18) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 p180
- (19) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 p183
- (20) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 p171
- (21) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 pp186-187
- (22) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 pp186-187
- (23) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 p187
- (24) 土井忠夫、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』岩波書店1995年11月「序言」p4
- (25) 土井忠夫、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』前掲「冒頭」
- (26) 土井忠夫、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』前掲「解題」pp11-12
- (27) 土井忠夫、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』前掲「解題」p12
- (28) 土井忠夫、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』前掲「解題」pp12-13
- (29) 刘小珊《明中后期中日葡外交使者陆若汉研究》暨南大学中国古代史2006年博士論文 p207
- (30) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 p190
- (31) 馬場良二『Joao Rodrigues「ARTE GRAVDE」の成立と分析』風間書房2015年1月 p28
- (32) 青木志穂子「ジョアン・ロドリゲスの日本語敬語観」p187 <http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/2016.1.7> 閲覧)
- (33) マヌエラ・アルヴェレス、ジョゼ・アルヴェレス『ポルトガル日本交流史』彩流社1992年5月 pp49-50、刘小珊《明中后期中日葡外交使者陆若汉研究》前掲 p272
- (34) 松田毅一『日本巡察記』前掲 p26
- (35) 岡田袈装男『江戸異言語接触』笠間書院2009年9月 pp15-16
- (36) 村田昌巳「ヴァリニャーノと日本語」『サレジオ工業高等専門学校研究紀要』(40) 2013年3月 p19
- (37) 松田毅一『日本巡察記』前掲 p85、p93
- (38) 村田昌巳「ヴァリニャーノと日本語」前掲 p22
- (39) 松田毅一『日本巡察記』前掲 pp85-88
- (40) 松田毅一『日本巡察記』前掲 pp88-91

- (41) 森脇優紀「キリシタン『同宿』論」『上智史学』(51) 2006年11月 p246
- (42) 森脇優紀「キリシタン『同宿』論」前掲 p246
- (43) 森脇優紀「キリシタン『同宿』論」前掲 p246
- (44) 菊池武「道心と同宿」『印度学仏教学研究』第40巻第2号1992年3月 p810
- (45) 森脇優紀「キリシタン『同宿』論」前掲 pp246-247
- (46) 狭間芳樹「A・ヴァリニャーノによる佛教語使用の企図」「京都大学学術情報リポジトリ紅」2015年3月 p45 <http://dx.doi.org/10.14989/197477> 2016.12.24 閲覧)
- (47) 狭間芳樹「A・ヴァリニャーノによる佛教語使用の企図」前掲 pp46-47
- (48) 狭間芳樹「A・ヴァリニャーノによる佛教語使用の企図」前掲 p47
- (49) 松田毅一『日本巡察記』前掲 pp91-96
- (50) 松田毅一『日本巡察記』前掲 pp100-104
- (51) 高井喜成「キリシタン布教活動についての一考察」前掲 pp82-83
- (52) 高井喜成「キリシタン布教活動についての一考察」前掲 p87
- (53) 高井喜成「キリシタン布教活動についての一考察」前掲 p88
- (54) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』八木書店2001年6月 pp175-178
- (55) 池田大作、杜維明『対話の文明』第三文明社2007年1月 p301
- (56) 池田大作、杜維明『対話の文明』前掲 pp141-142、池田大作、マジット・テヘラニアン『二十一世紀への選択』潮出版社2000年10月 pp351-352
- (57) 池田大作、杜維明『対話の文明』前掲 pp141-142
- (58) 池田大作、杜維明『対話の文明』前掲 p140
- (59) 池田大作『「人間主義」の限りなき地平』第三文明社2008年3月 pp32-33
- (60) 池田大作『「人間主義」の限りなき地平』前掲 pp33-35
- (61) 池田大作『新・人間革命(1巻)』聖教新聞社2003年7月 pp182-183
- (62) 池田大作、杜維明『対話の文明』前掲 p154

学习中文的外因与内因

李 燕

引言

一、调查

二、分析

1、简介（真实的外因和内因）

2、外因作用 ①教材 ②分组 ③讲演 ④跨国互助

3、转化 ①实例 ②反例 ③目标

三、效果

结语

引言

作为30多年⁽¹⁾的中文教师，报告教学中文的调查是理所应当的。

首先题目中“学习”中文，而不用“学 好”。为什么？什么叫“学好”？只有学习、学习、不断地学习，才是目的。其次，“外因”是指家庭背景、社会环境、父母老师亲朋好友的影响、教育、鼓励，社会媒体和舆论也构成了一部分不可抗拒的外因。而“内因”，是发自内心想做，并将想法变成决心，付

(1)1991年做本校专任前，曾做过东京都南多摩某高中非常勤中文教师4年。

诸于行动。外因和内因是如何相互影响和转化的？这是本篇的目的所在。

2017年秋学期⁽²⁾笔者的课堂调查、内容简介、分析研究，是为了在不断进展的国际化中，日本学生能更迅速扎实地掌握中文，并且坚韧不拔地学下去，教师应该怎样为实现学生们的实际的真正的心愿：促进中日友好事业发展和亚洲乃至世界和平作点滴贡献呢。

一、调查

这是 1 至 4 年级中文专业课⁽³⁾选修者的课上答题、作业、口头发言的整理，仅限于笔者担任的课，其中包括个别其他专业、学部的选修者。

表 1： 44名“学习中文的外因和内因” 2018年 1 月

年 级	学 部、专 业						外 因		内 因			
	文学部			教育学部			幼时曾 在中国 生活	受 父 母、 教师、亲 朋、社团 等影响	喜爱中 国历史 文 化、 想去眼 见为实	想与说中 文的朋友 用中文交 流、进而 交流日中 文化	毕业前 想获取 本校的 上级语 学奖赏	看好将 来用中 文工作 交友旅 游等
	中文专 业	英文专 业	社会学 专业									
1	10						1	5	3	4	10	8
2	11		1	2	1		1	6	5	6	13	10
3	10		2					6	4	6	12	10
4	2							2		2	2	2
5	1	3				1	1	3	2	4	5	5
计	34		3	2	1	1	3	22	14	22	42	35
44	3											
A	B			C	D	E	F	G	H	I	J	K

表 1 的简述

A 总数44人。

- (2) 2017年 9 月到2018年 1 月的调查。
- (3) “中文讲读”、“中文作文”、“日语翻中文”、“研究班中文”课。

- B 文学部中的中文专业34人占75%；英文专业 3 人，均为 5 年级；社会学专业 2、3 年级 3 人。
- C 教育学部 2 年级 2 人，都曾在一年级末去过中国短期留学。
- D 经济学部 2 年级 1 人，抱着学习中文将来有用的想法而来。
- E 经营学部 5 年级 1 人，曾去长沙留学一年，世界观大为改观，留学前专注英语，现在中英文水平都达到了上级。
- F 外因“幼时曾在中国生活”共 3 人。1 和 2 年级 2 人，都因父母在中国工作而出生或生活过。5 年级 1 人，曾居住在中国居民家中。
- G 外因“受父母、教师、亲朋、社团等影响”22 人，占半数。
- H 内因中“喜爱中国历史文化、想去眼见为实”14 人，约三分之一。
- I 内因中“想与说中文的朋友用中文交流、进而交流日中文化”22 人。尤其近几年，来自中国大陆、香港、澳门、台湾、新加坡、马来西亚的留学生增多。日本学生与留学生们同班同学、同课堂、同社团活动、同宿舍室友生活等增多。
- J 内因中“毕业前想获取本校的上级语学奖赏”，占总数的95%以上。
- K 内因中“看好将来用中文工作、交友、旅游等”，几乎占总数的80%。

表 2：“留学、获取中文资格”

2018 年 1 月

年级 (人数)	留过学		马上去留学		获取中文资格		
	中文圈	英文圈	中文圈	英文圈	HSK 4 级水平	HSK 5 级水平	HSK 6 级水平
1 (10)			9		5		
2 (15)	5	1	4		4	5	
3 (12)	6	1	4				
4 (2)	1	1		1	1	1	
5 (5)	3	1				2	2
计 44	16	4	17	1	10	8	2
A	L	M	N	O	P	Q	R

表 2 的简述

- L “留过学”的“中文圈”（中国大陆、台湾）16 人。

- M “留过学”的“英文圈”4人。2年级1人短期留学马来西亚，3年级1人短期留学美国，4年级1人短期留学欧洲，5年级1人一年留学印度。
- N “马上去留学”的“中文圈”（包括再一次去留学的4人）17人。
- O “马上去留学”中“英文圈”4年级1人，留学菲律宾。
- P 获取中文资格 HSK 4 级水平（包括日本的“中国语检定考试3级”）计10人。1年级占半数、2年级少半数。其中4年级1人长年打工，后就职活动繁忙，心神不定中学习中文，没有持之以恒的努力，从2年级取得中文资格 HSK 4 级后，又参加过数次考核，仅考前临阵磨枪，中文水平仅有倒退毫无进步。
- Q 获取中文资格 HSK 5 级水平（包括日本的“中国语检定考试2级”）8人。2年级居多，几乎占总数的一半。4年级1人，去台湾留学一年后仍不放过一切机遇继续深造。5年级2人中，1人印度留学，获取英语上级资格后，不负几年来坚持学下来的中文，又获得了汉语 HSK 5 级合格。
- R 获取中文资格 HSK 6 级水平（包括日本的“中国语检定考试准1级”但不包括更高一级的“1级”）2人，均为5年级和曾去中国留学。中文专业1人和英文专业1人（此人留学前就获取了英语上级资格）。

二、分析

以下是对上表有关“学习中文外因与内因”的简介，分析和研究其相互作用和转化机制。

1、简介（真实的外因和内因）⁽⁴⁾

(4) 内容来自选修者自白，笔者文字推敲。

F（外因）幼时曾在中国生活	<p>1 年级 1 人：我的幼年，在台湾与父母共度了断断续续的 1 年。台湾人说的国语，与中文的普通话有点不同，但是，学习中文时，还是感到很亲切。</p> <p>2 年级 1 人：我生在北京，这一直引我为自豪。虽然幼儿园和小学上的是日本学校，但是，父母亲都会说一些中文，我们一家人出外买东西或中国国内旅游，也都要接触中文，我现在仍然感谢北京的幼年生活，这是我学习中文时能正确发音的关键。</p> <p>5 年级 1 人：我在高中时对中国很好奇，参加了住宿河南开封的居民家中的一个月的交流活动，我不好说得太清楚是怎样受到文化冲击的，因为这可能辜负了接待我们住宿的房东的热情，这一打击之后，我就只想“哈日”的台湾留学，看看那里的情况如何；正巧父亲与台湾有些工作关系，这对我去台湾留学有帮助。4 年级回国时，又找到一位来日本的台湾留学生，我们俩每周都一起互教互学日语和中文，之后，我顺利合格了 HSK 6 级。</p>
G（外因）受父母、教师、亲朋、社团等影响	<p>2 年级 1 人：我父母在大学的中文课时相识，后来毕业后父亲当上报社记者，母亲也进入一家公司工作。我哥哥虽然学西班牙语，留学西班牙一年后回来，听他讲述的人生设计和朝气蓬勃的姿态感染了我。我喜爱中文，这就要去中国留学，也要像父母和哥哥那样，设计好自己将来做日语教师的蓝图；日语用汉字（虽然写法有些不同）和成语词汇，对当好有教养的日语教师是很好的帮助。</p> <p>2 年级 1 人：我校创始人池田大作先生教育我们，为了实现世界和平，先要实现日中友好为先的亚洲和平。因此，我上大学后就选学中文，还参加了“中国研究会”社团。课上学习中文、中国历史和社会，课下和社团的同学一起研究中国。大学节时，把整理后的研究资料送上展示板。中文越学越有意思。上次去中国时，我还当上了恳谈会的翻译和司仪。</p> <p>3 年级 1 人：为拿学分，硬着头皮选了中文课，老师的授课和讲解令我入迷，学中文没想到越学越有意思。我从小喜欢日本国语，而汉字是我的特长，只要掌握了日中不同汉字的写法，把握好中文发音，我可以用日中相通的成语和典故，使日语文章更加意义深刻。</p> <p>3 年级 1 人：我虽然专业是社会学福利，但我从小受父亲影响，对中国古代传承下来的中医药学很感兴趣。父亲告诉我，只要学了中文，直接看懂中药的书籍，为毕业后能做一名在医院里给病人当咨询的福利方面的专业人员，掌握一门中医药学的知识就应该很重要。</p>

<p>H 内因中 “喜爱中国历史、想去中国眼见为实”</p>	<p>2 年级 1 人：我喜欢中国历史，用日文读了不少中国历史书。可是没去中国之前，对中国印象不好。去年底，中国大使馆又一次招待我们社团去中国历时 5 天的游览访问。这是我第一次去中国。我们走访了北京历经千年之久的名胜古迹、旅顺日俄战争旧战场等，我反省过去的战争带给中国人民的残暴，作为新时代的和平主义者，我改观了对中国的印象，要为日中友好做贡献。</p> <p>2 年级 1 人：我从小看了很多中国历史方面的漫画书，如三国志、水浒传等等，尤其对三国里的人物印象深刻。后来又通过《赤壁》这一电影，看到了中国历史上这样有才艺的各类英雄（当然借助了艺术夸张）。因此我想学好中文，用古代中国的智慧和人品作参考，培养自己成为现代有智慧有能力的人。</p> <p>2 年级 1 人：我很喜欢大熊猫。这之前，上野生动物园诞生了一只小熊猫香香，除了看网上的萌态动画，我还专门为看它，去了人山人海的动物园。我的中文发音占了我曾经生活在中国的便宜，但我更要很好地学习。</p>
<p>I 内因中 “想与说中文的朋友用中文交流”从而交流日本与中国的文化</p>	<p>1 年级 1 人：圣诞节时，我在六本木一家快餐店打工，一位中国客人先用英语又用中文问：厕所在哪儿？我用刚学会的中文告诉了她，真开心！学以致用，是这样有意思的。</p> <p>3 年级 1 人：中国游客经常光顾到我打工的涩谷鸡肉串儿店来，我负责用不熟练的中文招待他们，这就成了我要更好地学中文的契机。</p> <p>3 年级 1 人：我现在正在交男朋友，他是中国留学生。我过生日的时候，他买了很珍贵的礼品送给我，我感到又惊喜又不好意思。另外和日本的风俗习惯不同，他把我这个恋人介绍给他周围的朋友。我学了中文后与他相识，他对我中文的提高给与了极大的帮助，使更想了解中国人的朋友观念和家庭观念。</p> <p>3 年级 1 人：如中秋节，春节（冲绳还在过）等习俗，日本和中国共庆，我感到很高兴。中秋节，中国人赏月、家人分吃月饼；日本人吃糯米团球，日本中国共度节日，这想到了远远流长日中交流史。在宿舍，我是领导，与来自全世界的留学生接触，自然能看到和了解到中国留学生在中秋节时的食品，我们用日语和中文一边交流一边品尝，很有意义。</p> <p>3 年级 1 人：我在日本高级豆腐餐馆打工，那是一间穿日本和服、按日本高级饭店传统接待客人的店。我在那里学到了很多日本式接待客人的高雅的方式。例如怎样穿和服、怎样斟茶、怎样拿给客人餐具和餐饮。我愿学好中文，把日本民族的真诚的服务姿态和风格，传达给客人们，使客人通过餐饮和我的服务而充实愉快，并留下终生难忘的记忆。</p>

J 内因中 “毕业前想获取本大学的高级语学奖赏”	<p>4 年级 1 人：为了不辜负父母期望，我和妹妹都考合格了 HSK 六级，但是未找到合适工作，我们俩准备留级一年，在充裕的时间中找到理想的工作，毕业典礼时登台领奖（达芬奇奖），那该让父母和家人有多荣耀多光彩啊。</p> <p>5 年级 1 人：从台湾留学回来后，用三个月的时间攻克了 HSK 六级，考试合格后，我马上申请并获取了最高语学奖赏“达芬奇奖”。这是一块约 A 5 纸大小、厚 1.5 厘米的水晶板，透亮的平面上刻着大学的象征标记、我的英文姓名和获奖年月，装在高雅湛蓝丝绒的礼盒中。可是后来我后悔的是，如果晚一些申请获奖的话，我会在毕业典礼时登台领奖，那时父母家人看到如此的场面，该多么高兴和激动啊。</p>
K 内因中 “看好将来用中文工作、交友、旅游”	<p>3 年级 1 人：我的志愿是毕业后，做一名日本对外大门口的接待员、国际机场航空公司的地勤。我想在那里让全世界的宾客都领略到日本的优良服务态度和那深藏的服务精神。为了把日本服务第一的传闻落实在自己的行动上，我要首先学好英语和中文。</p>

2、外因作用

何谓外因？近朱者赤，近墨者黑。在此强调的是，为了选修者更好地学习，教师要充分发挥和打造好“外因”的力量。要承认：教师是课堂教学中“外因”力量的总计划和总指挥。

①教材

教科书、中文资格考试模拟题、现今报纸杂志的热门话题、高年级学生的奋斗史、学生突破中文升级的话题、学生个人在期中、期末研究汇报的公开发言。按既定计划上课，也不忘根据具体情况加减内容。

②分组

五至六人一组，有三种方式：

- a 上级、中级、初级的三种水平，各分 3 个组。
- b 上级和中级水平一组，中级和初级水平一组，组内交流、互教互助。
- c 经常轮换小组成员，使各位学生之间都能够相互切磋。

③讲演

这是除了小组学习之外给与每个人学生激励、启发的课堂。每个学生都轮流把自己个人制作的中文作文由教师修改完毕之后，背诵发言。这样，在班集体当中，相互知道其他成员在想什么，有什么兴趣爱好，有什么新的发现，相互激励和启发新鲜感和求知欲。由于中文水平高低不等，很可能听之后懵懂，所以在中文发言之后，必然会有本人相应的日文解说，这是必不可少也是更加能刺激思维的学习方式。这也就是由学生为主体建造的外因学习环境。

④跨国互助

日本学生与来自中国和说中文的东南亚各国留学生们同一堂课，是相互用中日两文学习不同文化、了解异国风土人情、风俗习惯、增进和平友好的重要机会。

有些学生提出分小组时，应该不要固守在特定人选，班中20多名学生轮番调换与没有交流过的人在一组，这样更会促进分组学习探讨的收效。今后广泛采纳学生的建议，大胆尝试各种有益的做法。

课堂教学在实际上，常会遇到要顺其自然、因势利导的情况。

3、转化

转化，是外因与内因在统合中的变化。实例来自于一位国外访客。

2017年10月末的一天，同一学部的俄语老师介绍了一名犹太人、美国国籍、在中国生活近20年、中国姓名赞民兴、42岁的先生，从香港特意赶来与各位选修3年级中文作文的学生们课上见面，并讲了“留学中国后，怎样自学成功”。赞先生的中文说得流利而有逻辑，中文词汇、社会经验都相当丰富，从中看出他对中国现代史、现代社会了如指掌。这节课给了3、4年级的学生以极大激励。

犹太人，这是世界上最聪明最富有的民族，他们的智慧是从哪里来的

呢？⁽⁵⁾

犹太民族的历史有五千年之多，由于各类历史事件，他们现在分布在世界各地。注重教育的他们，在17世纪就消灭了文盲。据说，孩子很小的时候，犹太民族的母亲会教育孩子：当你在灾难中，想带什么东西逃走呢？孩子可能回答，是什么什么东西。他们的母亲会告诉他们：你知道吗？世界上有一种永远被人抢不走而属于自己的，这就是智慧！在那时，你只要带着智慧，即便走遍天下，也绝对能顽强地生存下去。⁽⁶⁾

①实例

赞民兴先生回答学生们的问题时说，他刚到中国⁽⁷⁾时一句中文也不懂，靠着随时随刻拿小本子记中文词汇、拼音、英语注解，每天与中国人对话而一点一滴地学习。他在中国三个月后能应付日常生活会话，半年后能工作。他没交过一分钱学费学中文，都在实际中修得。这与他的犹太人基因、与强有力的自我教育能力和立了志的奋斗目标吻合。他说，祖父母辈在上世纪移民美国，我生在纽约，长在华盛顿，可现在回老家，已经不是过去的样子，父母亲搬到了佛鲁里达。因此，中国成了我要扎根的家了。

赞先生说，为什么提出要与学中文的学生用中文交流呢？他认为：要鼓励学生们学好中文。现在世界最大的市场在中国，学了中文，活动在广阔的天地是不言而喻的⁽⁸⁾。当然，不可否认存在着异文化冲突，这都需要用中文相互磨合解决，这个过程就是拓展人生的过程，一定会有好结局。

(5) 2017年10月27日查网“犹太人”。

(6) 2017年10月27日查网“犹太人的教育”。

(7) 赞先生说当初在湖南长沙。

(8) 赞先生介绍说，他有两份工作：一是美国某公司的中国市场咨询，二是自己创业的公司。

②反例

与上述实例恰恰相反的也不否认没有。

个别学生仅为修得学分，上课下课都不情愿学习中文。他们错误地把中文看成是简化字的日语文章，想当然地用日文句子结构写出中文的作文，这也成了不重视基础发音的弊病。

还有个别学生在一年级时没打好发音基础，上了二年级才发现难以纠正的错误的发音而骑虎难下。有的半途而废。坚持学习下来的人，又在发音上无从下手、困难重重，以致心灰意冷，最后勉强学到期末，之后就再也不敢触碰中文了。

学好中文发音是基础的基础，相当关键。对习惯了日语较多单母音发音的日本人来说，若小、中学阶段没有学过英语或外语，就要下苦功夫才能彻底把握好地道的中文发音。如中文发音的难点：母音 e 和 ü 以及子音 zh, ch, sh, r，还要多练习卷舌音、声调中一声和三声的发音，之后再与短句以致稍长的句子练习。只要功夫在，自然能学成。

要想学好中文，就要杜绝“两天打鱼三天晒网”，从学习中文的初期就要逐渐养成每天写中文日记、听中文广播、看中文报、听中文歌的习惯，尤其在短期和长期休假中更不能放松。对于中文作文，刚开始可能不习惯直接用中文写作，但是不要怕，尽量多写，写后虚心地向懂中文的朋友、老师不断地修改，逐渐体会到中文的句子结构与日语如何不同，并渐渐习惯用中文表达，这需要长期的强韧毅力才能熟能生巧。写中文作文是日本人特性的大发挥，写的过程就是搞懂中文语法结构、正确地用中文表达的过程，这样一点一点地学着写下去，再通过背诵发言，就会逐步发展成会听会说和全面地掌握中文的人了。

③目标

目标有大有小，每年的寒假、春假、暑假，是集中学习的好机会，而只顾

打工、游玩，那绝对会把已经学到的几乎忘掉，在新学期时发现与其他假期坚持学习的人变得差距悬殊了。

中文，在大学毕业后到底有多少使用价值呢。最说明实力的就是上述的赞先生一例。在教过的学生⁽⁹⁾当中，无确切统计，约少于十分之一的人现在中国大陆、台湾、香港或者新加坡、马来西亚、韩国、法国工作和生活。情况各类：大学教师、大学职员、公司翻译、国内外航班，鉴于英中两文精通者穿梭于中外的公司的，与中国人婚后奔赴于中日之间的。有成家后公司派遣驻外工作，也有长期驻守中国大陆出版业的。还有与欧美人或中国人后裔结婚在新加坡扎根的，有教授大学日语或中文，也有相夫养子不忘当中文教师的等等。不管做什么工作，在大学学了中文，一定都具备无限发展的可能性。

三、效果

审视学习效果，应该以学生们的反应为依据。近日笔者获悉了本校“学期末学生评价”⁽¹⁰⁾，简介如下。

一年级“中文讲读”课评价⁽¹¹⁾

最初无自信，托老师和中国留学生的福，教会了我不懂的地方，非常愉快。虽是初级，但是提高了不少，为能跟随全班进度，咬牙挑战，之后感觉很爽快。

秋学期增加了中国留学生，因此全班的中文水平急剧上升。我虽是3年

(9) 自1991年当本校专任讲师至今，教了约700多学生。

(10) 各学期末均由本校问卷调查，收集各科目学生手机评价教师。而笔者研究班人数5名以下，不在评价范围之内。

(11) 2018年2月5日本校网上传来“2017年度秋学期学生课堂调查结果”。此调查为日文，笔者翻成了中文，以下简称“课堂调查结果”。

级，但从春学期就参加了这堂课，看到1年级如此快速成长，对我是一个不小的促进。

很高兴在课堂上能有机会接触HSK和中国语检定考试的模拟题。能够解答，很高兴。

二年级“综合中文”课评价⁽¹²⁾

老师对大家很热情，我们可以随心所欲地愉快地学习中文。用自己的想法写出中文，发言时才知自己的中文水平很低，这是与其他人相比的。

我们可以在课堂上成为朋友，很团结地上课，课上有机会和其他同学交流，感觉是学生们参与了授课的制作，很有意思。

通过这一年两个学期的课，我可以写出较长的中文文章，也是托了老师的福。老师表扬我，使我的学习劲头提高不少。每次都能感觉很愉快。我很想把这节课介绍给低年级的同学们。

二年级“中文作文”课评价⁽¹³⁾

有机会练习HSK的模拟考试题，我的作文分数提高了。老师的好心、耐心和鼓励，使我能很愉快地学习中文。

但是很想学好书面用语，这方面感觉不足。

初中级水平的中文好像很像上级水平，但我还是咬牙坚持下来，觉得挑战了，很充实。

三年级“日翻中”课评价⁽¹⁴⁾

老师提供的教材中有各类学问方面的文章，做笔译时学到很多。

(12) 2018年2月5日“课堂调查结果”。

(13) 2018年2月5日“课堂调查结果”。

(14) 2018年2月5日“课堂调查结果”。

通过日语字母的电影和中国菜会餐，除学习翻译还有交谈，很愉快。

很多中国留学生参加，感觉清新，不懂可以方便地向留学生请教，是愉快学习、增长新知识的环境。但希望老师将正确无误的翻译标准答案揭晓，否则还是不知道如何翻译准确。

希望课堂上，不仅仅停留在固有的小组成员，更要与没有交流过的留学生组成小组，相互取长补短，切磋笔意。

三年级“中文作文”课评价⁽¹⁵⁾

我的中文比上学期进步了，但还是感觉作文很难。最初选课时很不放心，怕学不好拿不到好成绩。现在有信心了。

有 HSK 考试对策的探讨，非常高兴。与中国留学生交流，可以问他们，从而成为朋友。学习气氛非常愉快。

日本学生和中国学生能一起学习，不仅作文，还交流了两国文化的异同，这真是天赐良机！希望每节课都有自由作文的时间。

这是一个上级水平的班，使我振作，并有了收获。

结语

笔者用半年时间，以日本学生44人的调查结果为主、国外访客自身学习中文的成果为辅，分析、说明教师在教学时强化“外因”的重要性。经打造的一至四年级的中文课堂，以语言环境、表扬激励、选修者的相互促进作为“外因”的主导动力。

学生们从要学好中文的目的出发，结束课程时，达到能够获奖是荣誉，而真正的实力毕竟要在实际应用中得到检验。为此，教师课上要做顶梁柱，顶起

(15) 2018年2月5日“课堂调查结果”。

学生们要做的中日友好后继人的栋梁，支撑住千年中日友好大厦的擎天柱。

总而言之，学习中文的外因和内因，是不断地互换、互助、互补的。课堂中的每一位学生，无论抱有怎样的理想、目的来学习，主宰课堂的教师都要了如指掌⁽¹⁶⁾。学生的健康状况、生活习惯、兴趣爱好、曾经学或没学过外语，包括饮食住宿、家庭社会关系，虽属私事不可探究，也要敏感地掌握于心，这才可能的放矢地发挥和使用激励、鼓舞、展现前途、明确目标的教育，使学生们将学习中文进行到底。

(16) 约10名学生表示在春假中认真学习并报考 HSK 或中国语检定考试。考核结果下学期知晓。

執筆者紹介（執筆順）

高 橋	強	創価大学教授
李	燕	創価大学教授

（編集委員）

高 橋	強
-----	---

創大中国論集

第21号

2018年3月31日発行

発行者 創価大学文学部人間学科中国語メジャー
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236
電話 042-691-2211 (代)

印刷所 株式会社 清水工房

Soka University Bulletin of Chinese Studies

No.21 March 2018

CONTENTS

Cross-cultural acceptance of Alessandro Valignano for Missionary — with a central
focus on "SUMARIO de las cosas de Japón (1583)", "ADICIONES del
sumario de Japón (1592)" Tsuyoshi TAKAHASHI

External Causes and Internal Causes of Learning Chinese
..... Yan LI

Chinese Major
Department of Humanities
Faculty of Letters
Soka University